



新鑄

椿說弓張月

續編  
卷貳

~13  
3908  
14









琉球國そのにじりぬらぬるに天地開き時一男一女化生して化生の父母

夫婦となるこれを阿摩美久と稱ふ傳信録小中山世鑑一説その人

姓を歡斯氏名の渴刺瓊ふ人これを呼び可老牟といひその妻を

多拔茶といふ又一説その夫が老なりまゝといひその婦をのまことと

是則阿摩琉球事畧記の夫婦

遠く三男二女及び長男ハ天孫氏これ國王の始なり二男と諸侯の始

と琉球事畧事畧庶民の始又長女を君と稱へ

二女を祝くと稱ふといふハ天神となりといふハ海神とす

用開のとれその嶋さちして浪は漂へりよりたけりといふ樹の生

かり次植ふややく小山の體と志こといふ草次植又あるといふ木

を植ふ國の形とつ志くれとも火といふのなるしハ龍火次乞ひ

木火土金水の五行成就せといひ使へり

日本より琉球を呼びて右流間の嶋といへり千載集大入の題

おぼつららるる島の嶋の人なれやうが言の妙をあらは顔る

大貳三位の袂衣右流間の嶋とあり下切ふる島の嶋といふ琉球と

あつてのたつと又本朝怪談故事小琉球神道記を引て云琉球

國の王宮は傍る小龍宮城と書を袋中の曰是をえるとは琉球

の龍宮の義あり音通さる故欽この國東南に在て水府の内極深

の底なれ龍宮とるをも故ある天龍地龍の社ありこれを天妃と

いふ天妃ハ唐山の神ハ波海今異國人の菩薩といふ足なり此方いふ

龍皇の神なるべし云云以上が國にて龍宮と呼ぶるところを

琉球のふとあへり問話休題かくて琉球國天孫氏九五世の國王と



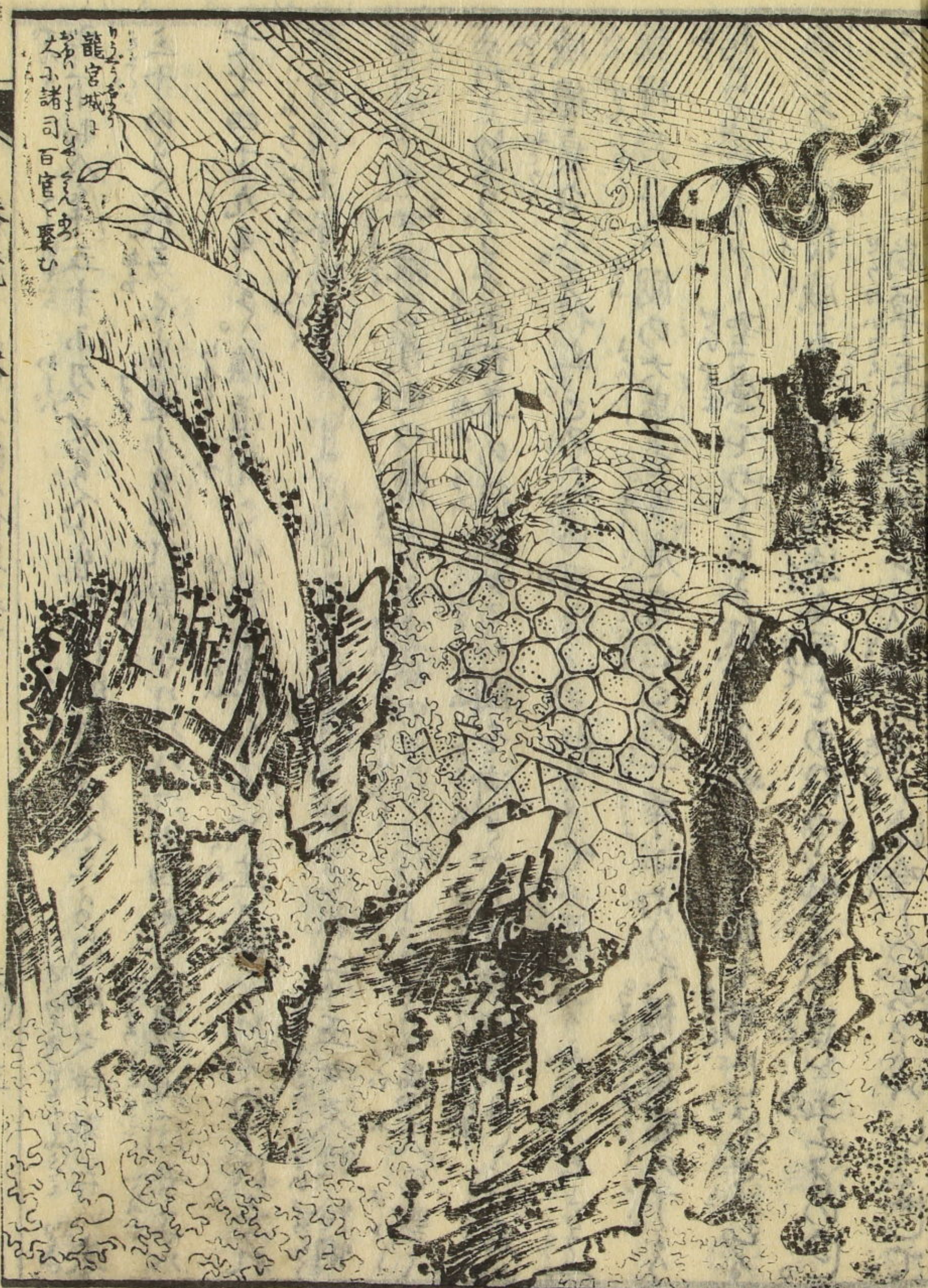
初子  
中山傳  
鎌倉  
小入

尚寧王とりの。この時君徳を衰て社稷將傾覆んと事の濫觴  
をよづらる。彼尚寧王才短く慮足らば王妃中婦君濫して妬妬く  
佞人利勇亦權を執り政を放あせしむるなり。比も尚寧王國頭の按  
司司馬順徳が女兒を納て王妃とせんとなす。故あつてこれを止國相利射  
女兒を納して中婦君とし。琉球の王妃を順徳が女兒を並妃の位に  
編第ニ卷小入する。廉夫人也。あるに中婦君の才を世小勝して死燕  
賈后の媚あり。王そのを惑溺し内外の事悉そのの所を用ざらざるは  
加梅國相利射の近曾才なり。その任紫中宦利勇政のつらうは君を  
欺き民を虐得雲の驕を極め。天孫氏二十五世一萬七千七百八十余年  
の仁政忽地に廢れて國人叛を離んと。このよれ世子なく。廉夫人の腹小  
王女只一人出生あり。尚寧王を年の齡四十小向んとせしと。此小誕生あり  
初子なり。これ以寧王女と名づりて鍾愛大する。天孫子世の國王  
り王子なり。と。王女お位を傳ふる。舊例もあれば中婦君のゆくすゑ  
のよを名ひや。や。姫と。か。り。な。れ。と。彼廉夫人へ。よろづは慎保く  
聊も寵をく。の。も。て。驕慢の氣を。毎事お謙遜して中婦君を敬み  
みぞ憎し。と。ひ。な。が。足。を。め。し。ひ。ひ。を。と。べ。れ。中。う。う。て。黙。止  
あり。終お寧王女の成長も。隨。顔。之。の。儀。な。れ。し。ん。が。と。し。孝  
公よのつみ。勝。と。その。怜。悧。と。丈夫。と。い。ふ。も。及。さ。る。み。ま。り。こ。と。以  
て尚寧王いよ。愛。慈。こ。の。王。女。お。位。を。傳。む。や。と。思。ひ。多。小。終。お。寧。王  
女。や。十四。才。あ。ぞ。なり。多。ひ。ね。抑。琉。球。の。その。國。偏。小。して。南。北。長。サ。四  
十余里。東。西。の。狭。く。して。十里。小。過。と。と。る。一。里。を。都。を。首。里。と。い。ふ。  
この餘の郡縣と間切と唱。その地の領主を按司といふ。官位の品級正



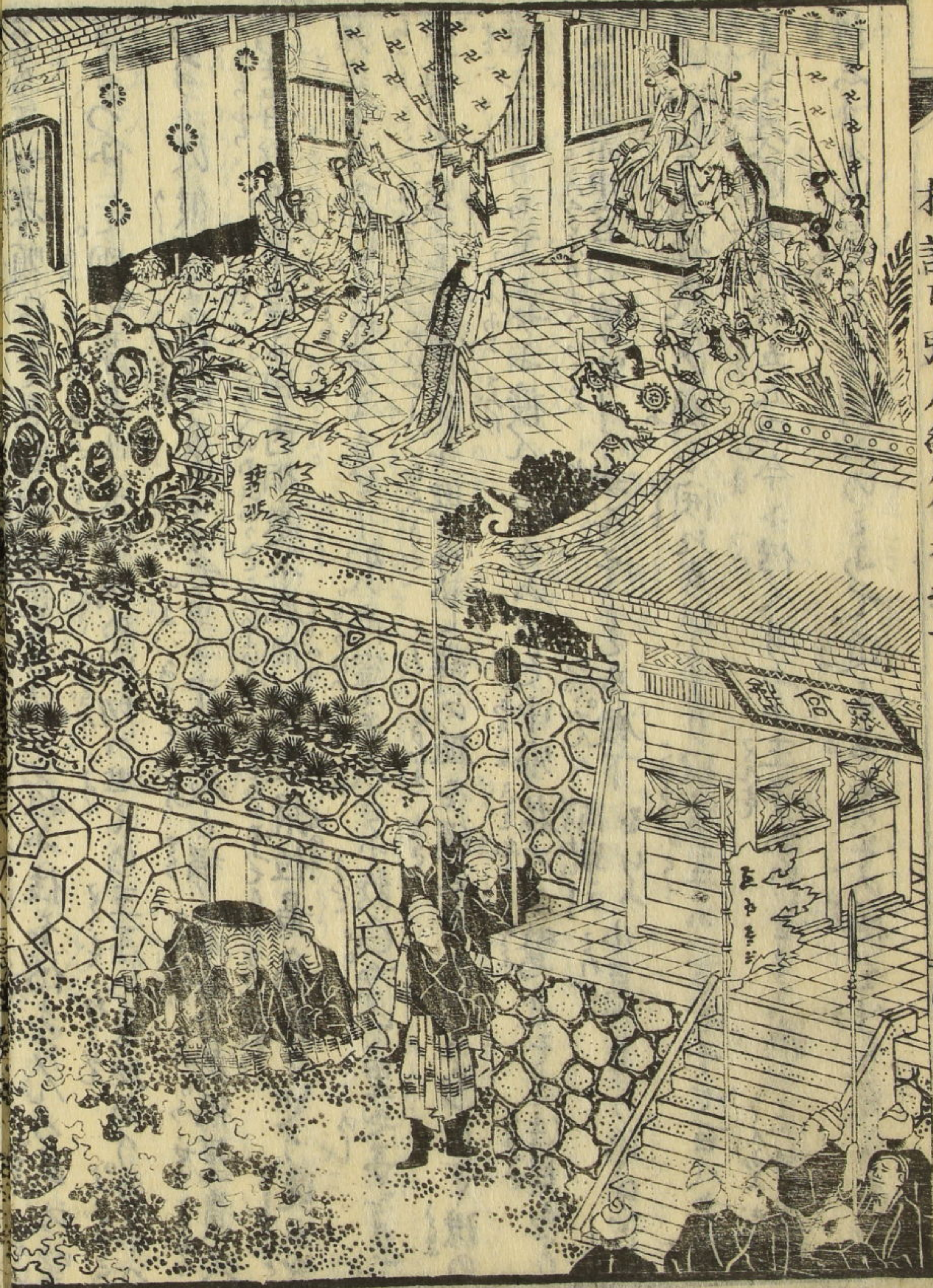
後とて九等あり。國相元侯ハ正一品。法司ハ正二品。紫巾官ハ從二品。  
 又これ國の大臣にして三司官と稱す。又某地の親方と稱す。又耳目官  
 又御鎮側ハ正三品。謁者ハ後三品。贊議官ハ正四品。那霸官ハ後四  
 品。察侍紀官ハ後四品。那霸佐敷當座官ハ正五品。勢頭官ハ正六品。親  
 雲上ハ正七品。提牌金ハ從七品。里之子ハ正八品。里之子佐ハ後八品。  
 筑登之ハ正九品。筑登之佐ハ後九品。この外紫金大夫。正議大夫。長吏  
 都通度支官。王法官。九引官。内宮。近習。内厨。國書院。良醫所。  
 茶道。祝長。ホの。枚。奉。小。皇。の。い。び。か。て。尚。寧。王。ハ。あ。り。日。の。諸。司。百  
 官。を。龍。宮。城。の。正。殿。に。集。合。寧。王。女。と。世。子。と。して。琉。球。二。顆。の。珠。と。内。儀。  
 廉。夫。人。と。も。中。城。の。世。子。殿。に。移。入。と。あ。り。は。し。を。受。え。ち。し。し。り。の。お。  
 衆。皆。答。さ。り。ひ。を。り。つ。か。君。齡。半。百。あ。及。び。多。も。王。子。お。し。ま。ん。と。れ。  
 とも王女孝順にして且聰明膏智なり。これ小位を傳多らんハ民の望  
 ところにして國の幸甚。夫中城の間切ハ世々の王子の采地あり。世子ハ  
 かろふに彼処に移住するをりて。世々中城殿と稱す。今日ハ是福星貴人  
 の吉日なり。常言く甲丙相邀入虎御。更逢鼠位最高強と云。速ま  
 決定するに。と祝せし。尚寧王女と。小位。女。て。里。之。子。を。り。て。  
 中婦君寧王女廉夫人を迎ふ。と。緯。の。速。を。脱。き。し。つ。う。やく。し。く。珠。の  
 匣を捧り。王女小授んとし。あ。あ。そ。中。婦。君。女。お。驚。き。そ。と。注。目。あ。り。  
 志。く。紫。巾。官。利。勇。忙。し。く。班。を。さ。り。出。殿。下。を。り。小。臣。が。ま。り。ひ。の。を。受。  
 多。人。往。古。天。孫。氏。の。國。を。開。れ。ま。ひ。り。以。来。年。ハ。一。万。七。千。七。百。八。十。餘。  
 年。ふ。及。び。御。代。ハ。五。五。の。今。ハ。傳。入。ま。あ。王。子。お。し。ま。ん。と。れ。バ。王。女。の。讓。  
 位。あ。り。は。し。古。く。よ。り。の。の。こ。あ。て。近。き。世。の。子。の。例。を。受。え。と。し。一。つ。





龍宮城  
大諸司百官入史

春説弓辰月賣高家



春説弓辰月賣高家



殿下も八年五十ふ及せども。はは壯健めええのひ加之中婦君の未  
 三十のくは多くも過し多のれ男子ハ八六十四世して陽道団女子ハ  
 七七四十九あり。陰道団この故も老る子次生りのかたもあはれ  
 ばこの後王子誕生はし。まじともひ定む。これ二ツ玉女天性伶俐  
 あつせども。女流あり。世の常言ふ才女の置きたる人より。愚夫の黙く  
 されといふ。まが王百年の後王女この國を御さば大臣政を放し。君の  
 威徳衰ふん。これとこの三ツの可う。これをして。吉凶しうあとう志し。あ  
 讓禪授受ハ國の大事。安危存亡この一挙おめりて禍蕭牆の下より  
 起らん歎。ましく聖慮をせむ。これへうりや。と言語を巧し。くさむ。  
 ふこその控威もや。怕れん。送ふ面を。あいつ。ゆき。び言を。出さ。このは。  
 こつ。ふ至。く。尚。寧。王。ハ。忽。地。よ。と。ひ。感。ひ。且。く。沈。吟。し。つ。あ。う。ふ。い。し。は。して。  
 よ。う。う。ん。と。同。し。利。勇。答。て。愚。案。派。り。て。す。う。ま。ん。ハ。世。子。と。定。ち。ま。ふ。み。ま。ご。  
 返。り。し。ん。王。子。誕。生。す。は。は。る。へ。德。長。う。る。大。臣。と。女。皆。は。して。國。を。讓。り。ん。  
 こ。て。長。父。の。計。る。く。め。今。日。の。ま。け。と。ひ。と。ま。り。ま。じ。と。い。ふ。その。為。体。傷。み。  
 人。な。れ。が。む。し。時。め。充。邊。の。班。を。と。く。こ。出。く。声。を。勵。し。君。王。い。つ。な。し。こ。ハ。  
 利。勇。が。巧。言。小。惑。さ。れて。國。の。大。事。を。恨。ま。う。ぞ。や。こ。い。ふ。の。あり。け。り。  
 衆。人。驚。き。これ。を。見。か。く。と。ば。その。人。年。紀。ハ。二十。有。餘。は。して。ま。ご。白。く。  
 目。秀。眼。と。鸞。鳳。の。ご。く。口。ハ。真。朱。の。ご。く。声。ハ。巨。鐘。と。似。り。び。ふ。り。金。  
 の。簪。し。て。紫。綾。の。官。帽。を。載。れ。身。衣。深。青。の。袍。を。被。く。龍。蟠。の。紋。の。る。  
 黄。の。帯。や。結。ぶ。この。人。ハ。これ。前。國。相。毛。公。が。子。國。頭。の。按。司。司。馬。順。德。  
 が。姪。あり。けれ。中。城。の。按。司。毛。國。典。あり。當。下。毛。國。典。領。首。あ。て。ま。う。し。  
 中。り。利。勇。之。箇。條。の。不。可。と。述。ぶ。世。子。を。定。め。ま。ふ。み。阻。む。その。言。理。

毛國典  
 中山侍  
 信録卷之  
 二  
 二  
 二

春説り長月讀書卷之二



のれふ似く。理は稱つと。王子はしほまされ。時ハ位を女子はけまのり。  
 近と世は例はしして。これを止まら。えるところは。あつて。女とて。一。年。  
 上古の昔政を廢す。先王の法則ハ。情まあふ。あつて。や。これ。一。今。後。  
 王子誕生あり。人として。首氣して。み。と。決。あつて。信。天。翁。といふ。も。  
 の。居。ま。り。食。を。待。お。似。と。い。と。お。ほ。つ。は。し。王。女。中。城。ま。ま。あ。の。り。王。子。  
 降。誕。ま。し。ま。さ。い。王。ハ。位。を。王。女。に。傳。人。王。女。ハ。又。位。を。傳。人。子。に。傳。人。ま。ひ。る。  
 國。祚。ま。え。の。基。これ。お。ひ。る。や。あ。れ。これ。二。の。國。の。習。俗。あ。て。貴。も。賤。  
 女。子。ハ。十。五。歳。より。王。女。と。り。て。頭。ハ。龍。蛇。の。形。を。花。繡。の。を。い。じ。ま。  
 よ。か。ら。ぬ。習。俗。と。し。て。吐。く。り。の。あり。と。し。く。も。國。の。制。が。れ。は。つ。ふ。も。  
 ま。ま。の。り。し。ま。王。女。十。二。才。の。春。あ。つ。て。の。み。を。數。と。腕。折。爪。折。し。て。天。  
 神。地。祇。ハ。祈。遂。ハ。王。女。ハ。ま。ま。あ。げ。て。改。ま。花。繡。と。る。み。を。禁。指。の。節。の。  
 本。と。針。が。て。刺。爪。の。際。ま。て。ま。と。條。を。入。り。て。教。を。龍。蛇。の。紋。を。環。  
 ま。ひ。し。る。貫。也。も。思。ふ。も。便。宜。に。は。し。り。と。飲。び。て。王。女。の。因。徒。を。仰。  
 ぶ。は。し。し。この。法。と。す。ま。つ。ら。民。の。父。母。と。なり。ま。あ。ふ。足。と。り。これ。  
 と。つ。の。ま。の。喜。と。べ。れ。あ。つ。て。群。臣。と。え。て。不。可。と。ま。う。は。り。の。か。れ。  
 を。判。勇。が。一。言。に。躊。躇。し。ま。あ。つ。て。と。憚。る。ま。を。お。く。諫。り。その。直。  
 言。人。の。及。ぶ。所。は。し。て。當。然。理。ハ。判。勇。も。これ。と。争。ひ。が。く。や。あ。り。ひ。  
 久。ん。阿。容。と。と。閉。は。と。尚。寧。王。ハ。情。由。に。貸。て。や。く。に。さ。ひ。に。  
 ま。あ。り。く。と。い。へ。ん。あ。つ。て。珠。の。箱。を。捧。合。て。王。女。に。對。ひ。これ。ハ。  
 是。る。祖。王。天。孫。氏。の。國。を。用。と。ま。ひ。と。れ。虬。を。伐。て。民。の。害。を。  
 除。と。の。腮。と。裂。と。ひ。ま。ひ。る。兩。顆。の。珠。し。これ。ハ。その。一。顆。を。琉。と。  
 名。づ。け。又。一。顆。を。球。と。名。づ。け。灰。ハ。周。唐。士。あ。り。傳。國。の。玉。金。の。り。又。



日本あり。琉球の人は今やては國を奪はれしむるに似て。三種の神畚ありて世の  
 の天皇相付ととり入り。つがの珠もその類にして。いと貴らるる神室あり  
 こも。今よりこれを御身お附屬を廉夫人ともいひ。中城の世子殿は位  
 あり。と叮嚀お説示して。件の珠を王女お違はし。又毛國將と申す  
 招き。し。御彼地の按司とれば。今日より王女が傳とん。ともかくも教  
 導すべし。仰し。毛國將より。飲ひ。君王上お在を。微臣が直言を  
 納め。ふ。是お國の幸と。こころけを。され。皆り。も。ふ。万歳とそ  
 祝さ。唱られ。その中お利勇の。若と。入りて。中婦君と目と。え。あ。じ  
 王。不。諫。を用ひ。まり。後。お。ひ。あ。り。あ。る。の。あ。る。と。吐。さ。な。が。て  
 寧王女。の。吉。日。次。ト。と。彼。殊。と。ぞ。く。廉。夫。人。と。も。い。ひ。中。城。の。別。殿。は。後  
 して。後。の。人。の。文。官。武。官。内。侍。官。嬪。ホ。の。く。中。城。殿。王。女。お。あり。冊。と。  
 毛國將。毎日。お。仕。して。邦。家。の。治。乱。君。臣。の。得。失。と。物。語。し。や。あ。る。す。る  
 後。よ。王。女。を。ま。ん。く。お。の。れ。を。責。す。又。の。行。ひ。を。慎。ま。ふ。か。く。し。く。は  
 尚。寧。王。と。を。り。く。中。城。お。赴。た。く。終。日。お。び。く。し。王。女。の。孝。心。等。宗  
 廟。を。お。び。を。飲。び。ま。あ。お。中。婦。君。の。い。や。う。憤。は。追。る。ぐ。く。こ。ん。く。ま  
 ち。あ。の。あ。ら。さ。し。竊。し。利。勇。と。示。し。あ。い。し。や。う。廉。夫。人。を。や。結。果。え  
 王。女。を。や。り。し。ま。り。と。て。さ。ま。ま。か。ら。さ。ま。胸。を。の。と。苦。し。ま。つ。し。ま。い。し。その  
 便。を。お。び。し。し。み。の。羊。の。春。より。あ。ら。く。水。神。山。神。出。現。し。海。山。一。度。お  
 荒。れ。て。澳。戸。農。家。世。より。け。つ。れ。を。う。し。あ。ひ。ぬ。こ。の。君。真。物。の。怒。り  
 せ。め。あ。こ。と。て。間。切。く。の。里。人。ホ。國。の。美。場。の。さ。ら。く。処。く。の。拜。林。を。詣。て  
 笛。を。吹。大。鼓。を。鳴。び。し。さ。ま。ま。お。あ。り。慰。ま。し。て。も。と。え。て。その。強。る。う  
 了。る。り。大。約。琉。球。國。お。四。つ。の。美。場。あり。守。一。ハ。山。南。省。の。玉。城。都。首。里。の

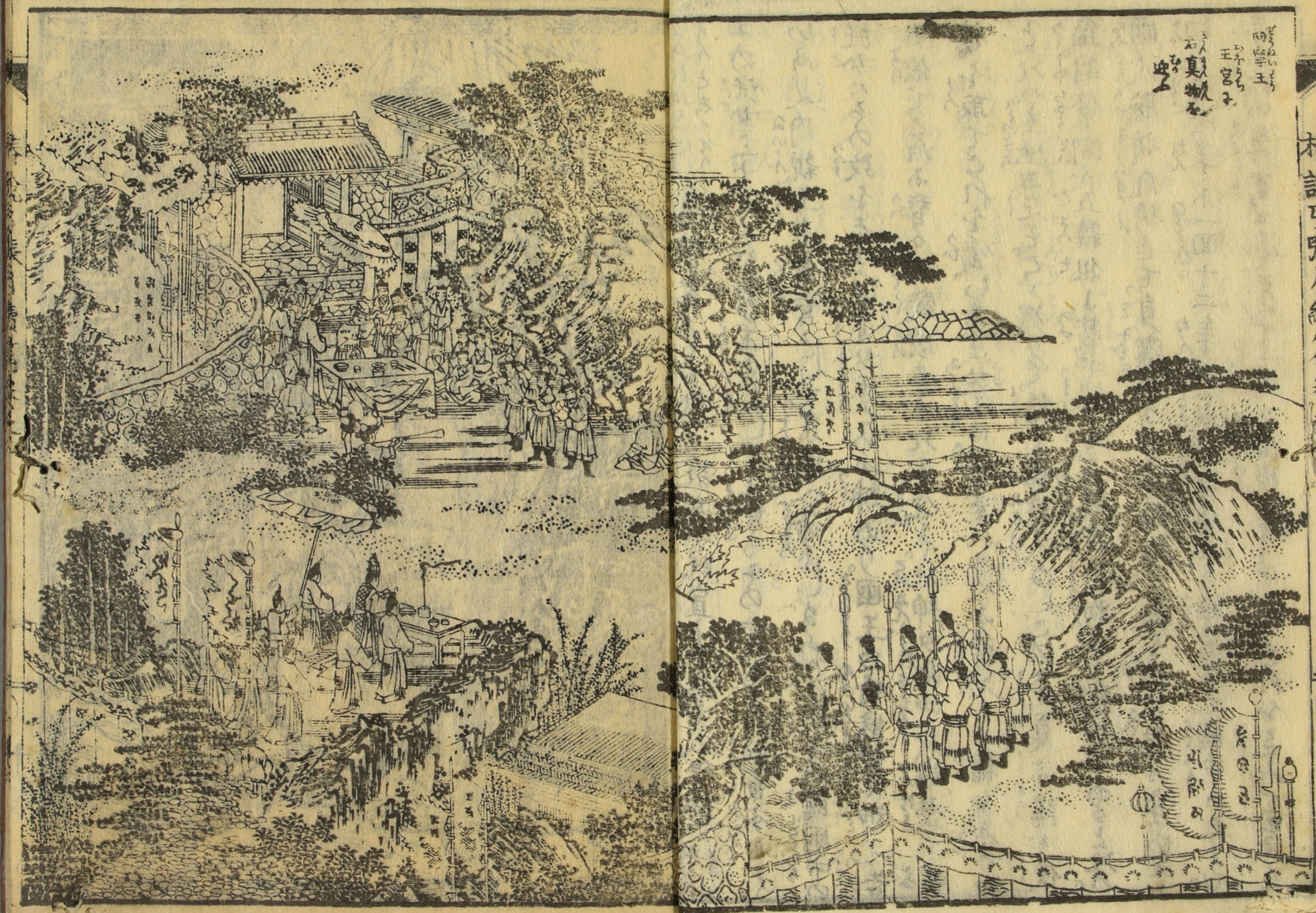


南の方へ 一の星す 一の処へ天孫氏 虬の腮を裂て 珠を絞る 処よりて 玉城を  
 築けく 第二の山南省の豊見城 地の雲城 雲の壇あり 毎年  
 國王の雨を祈るところ 第三の山南省の北谷に 天孫氏 虬  
 を殺せしところありて 海邊に 第四の中山省の高嶺一名 舊  
 虬山といふ 天孫氏 虬を殺し 其の骨 此の山ふらぐゆといふ 今  
 な 虬塚あり 玉城 豊見城と 首里の都より 南に當り 舊虬山  
 へ 西南に當り かのく 相去ること 三四里 不過 此れを 四第ヨ大地と  
 稱ふ ごとて 琉球國の道次の大木大石 ありて 此れを 神に 示  
 祀す 此れに 君真物を 信と 彼君真物と 稱す 神の 開闢以來  
 國の 守護神と 其の神 陰陽あり 天より 降る 此れを いかの 天  
 孫氏といひ 海より 上る 此れを 天孫氏といふ 一書あり

舞林の  
 木の巻の  
 巻之二

この神を 示し 出現し 託女 託宣して 処の 拜林に 託  
 女 託女 二十三人の 王家にして 王妃も 一人 此れ 則日本 亦  
 いみへ 内親王と 齋宮として 宗廟へ 奉じ しまふ 此れ 其の 餘國中  
 託女 其の 数を 考ふ 亦女王といふ 神あり 國王の 姊妹 亦神に 告  
 お依て 此れ 亦 五穀 成ると 此れ 及 此神 女國中 亦 漏歴し 稻  
 穂を取て 此れを 嚼い 此れ 女王の 嘗に 此れ 亦 稻 食ふ  
 と 此れ 亦 地 亦 死と 此れ 亦 終に 稻 盗人 此れ 亦 夏子 陽が 使  
 録 射 肇 淵が 五 雜 俎に 載て 詳し 又 彼 君 真 物 が 怒る 亦 あり 此れ 亦  
 國人 腕 折 爪 折 として 身 潔 中 あり 此れ 亦 此れ 亦 射 射 あり 此れ 亦  
 切し 又 七年 亦 一回 十二年 亦 一回 出現 あり 神 あり 國中 あり 此れ 亦  
 三十六の 萬 鳥 亦 あり 一時 亦 出現 あり 此れ 亦 此れ 亦 あり 此れ 亦 あり





同  
王宮子  
石真物  
虫

村談  
野  
集  
卷  
之  
九

九





稱く上國王より下民おゆるまでがこと祭るるのみまん。その神の生れ  
 まふ年の八九月のひあそりといふのあはれ。此の神の生れは  
 鮮明なる種々の莊嚴とて。その山を覆ひ竭さざること。因るその  
 山をあそりて。嶽とて。神の出現近なり。ありとて待たず。果してその  
 十月も至りて。件の荒神出現と。そのとれ。託女と玉の臣下。亦あつて。鼓  
 をうち。歌をうたひて。これを迎引く。玉宮の庭上。亦至り。傘は十本。飾り  
 成建く。神の行宮と。その傘は。大小あり。大は。中なる。高サ七丈。其  
 輪十尋。あのみ。小は。たの。高一丈。輪は。これ。小准と。又山  
 の神のあはれ。ことあり。その数或は。多し。或は。少く。年より。数  
 定まらぬ。人面あり。彼山の神を。えり。その相負。の。矇矓として。定ら  
 らぬ。衣裳の袖の長き。被るが。その衣裳。立地。小。変りて。あるひ。



錦繡のてく。或ハ麻衣のて。件の山の神呼ぶるの童女也。従へその  
名を二郎五郎と唱ふ。これが衣裳ハ日本の製ふおまじく。小袖ハ袴  
なり。山の神怒るるのりて。童ハ鞭つとわれハ童の鳴声犬の如し。

又おらちとて。一書ハ。海神のありつる。その神の身丈  
一丈あり。はて畢九附ハ大さうり。ようく視を結びて肩掛く。これ  
の神ハ。君真物と稱ふ。是さうに浮く物語ハ。日本

僧彼國ハ。日正と云ふ。骨董録中琉球事略ハ載  
られ。又五雜俎ハ謝在杭云。中國の人琉球ハ。彼ハ代々治危  
まるりの親神の出現さる。その声鳴くとして。蚊の如しと  
り。かく奇しきものなり。五穀を傷む國人を書るるなり。

是年山の神水神。荒と腹りて海山の挿了。その便れを  
うらうらひ。樵夫漁翁ハ。うらうら歎くは。そのまゝあり。中婦君  
ぬく。竊ハ利勇と示あして。腹心のりの狐。処々の間切ハ遣し。

國王忠臣の諫を聽まりて。寧王女を中城へ移し。世子ハ立り。由る  
君真物のあり。神怒りて。禍を降し。あまをいりせられ。されハ一犬形  
を吠て。群犬ハ吠るる。ひなれ。この風声。曇くとして。巷ハ満てり。

か。りける。高寧王ハ。流言を傳ふ。大ハ驚れ。俄頃ハ中城  
の按司モ。國將を。緯の趣を。ええ。と。虚実いと。公り。は。卿  
ハ。何と。と。同。毛。國。將。を。さ。て。み。る。の。の。き。これハ王女ハ。

彼君中城ハ。移り。か。は。し。て。い。う。行。ひ。を。慎。み。半。夜。の。お。ん。候。か。た。こ  
諸神。これ。を。谷。ま。し。努。実。と。な。し。る。れ。と。官。帽。を。か。か。り。て。



回答せしむるに高寧王は眉を頻めあかりといふも國民亦豊  
 見城に至る拔擢し或は処しの拜林に至て祭り慰められ又近曾  
 ぶつり雲城におりむして祈禱しその外北谷なる海神高山領  
 なるれ虹塚に幣帛を進むるも終に意欲なれりその意あへし  
 卿あつて退けられぬと念せんと宣さるも毛國典はは理  
 を盡して王女のうへに神の咎を宣さるるもなればしをまじし明か  
 て中城へぞ退りぬるの時中婦君の一五十一を竊はし簾をかき  
 冷笑ひつる毛國典を目送り殿下りしと曉得るもや彼毛國典を  
 廉夫人が後身なれば王女小の國を去りしおのれ國相となりて威勢  
 瓜ふりんと計校曩も言を巧めて王女が中城の世子殺し遷し  
 今亦辨言なるとりて君を惑しむるこそいと憎しむと罵る王女  
 ちくえんりてやうて王女がさうら居し賢妃のり所も理あり彼が  
 まうり所も理ありそれ暗してさひ涕めど誰うこの利害を論ど  
 事の吉凶を定むべしと問ふ中婦君かきみて紫中官利勇はその心  
 さま忠義ぬり且遠れ慮ありとて彼を同多りする王女がら入  
 わりしとて謎母の腹をさうとありまうりひりと君もさられ人あも  
 りられまんその歎れてもあまりのれど國の為めさひひる由なし用  
 めめと用ひたればとわいこころあこそあぶたれと涙にじりさか  
 け説く尚寧王は父もあへばさうが利勇が居せとて左右お仰せて連  
 忙しくさるに且して利勇をさうしう尚寧王これをちう侍らし  
 毛國典がらひつるもの一五十一説きしつ卿何とうさへれおま  
 け回答せよと仰されり利勇縁由をさうまうりて数回歎息し







ち馬より騰る。その夜首里小馳之。阿公が勤修の縁由を告  
 める。尚寧王の呆果く。子の并足の踏とををきり。中婦君  
 お告あして次の日利勇亦を召集合辰の年月日時おせられ。女  
 子あつが今度の機上進させ。親あつの。その親上田園が。生  
 りて生涯を安らうに過じし子あつの。その子に官職を授け。お  
 まれ恩賞の事に任させれば。國中に令あつせよと仰され。利勇  
 おらけり。中山山南北の同切三十六の属嶋は属託し。普く  
 これを索れ。絶く募ふ。意を致す。そのさし尚寧王を。あつり。募  
 り。有一日中婦君とこのさし。語り。あつ。中婦君微笑し。  
 凡いたし。活る。の誰え命のを。か。千の黄金を家。積と  
 も。命あつ。し。何えせん。この國。辰の年月辰の日辰の  
 時。おせられ。女子の。あつ。あつ。ば。め。れ。親。子。あつ。と。子。ハ  
 親を。喪。して。名。告。も。出。され。ま。こと。いと。理。は。付。れ。忘。さ。す。人。や。  
 寧王。女。ハ。辰。の。年。辰。の。日。辰。の。附。お。せ。れ。け。る。を。殿。下。を。あ。つ。び  
 顔。あ。て。お。い。し。あ。て。人。の。お。を。も。推。て。あ。つ。り。め。れ。し。し。と。い。ふ。王。お。れ。女。  
 て。掌。機。と。拍。げ。お。あ。ひ。忘。さ。す。り。王。女。と。今。茲。十五。方。は。して。あ。つ。の。辰  
 の。年月。日時。お。せ。れ。あ。つ。れ。民。の。父。母。と。して。國。の。難。は。私。せ。ば。神。も。い。ら  
 ず。納。受。め。ら。ん。是。彼。と。索。ん。り。王。女。お。機。上。して。民。の。患。を。穰。ひ。ら。ん。  
 さら。あ。つ。も。あ。つ。も。あ。つ。も。あ。つ。も。あ。つ。も。あ。つ。も。あ。つ。も。あ。つ。も。あ。つ。も。  
 授。け。お。あ。つ。の。類。あ。つ。は。し。や。災。が。穰。ひ。ら。ん。國。安。ら。つ。り。母。な。り。ね。こ。も。穰  
 り。子。な。り。ハ。それ。も。か。ひ。は。し。あ。つ。の。も。あ。つ。の。も。あ。つ。の。も。あ。つ。の。も。あ。つ。の。も。  
 は。中。婦。君。お。告。す。王。女。ハ。後。世。あ。つ。子。お。け。り。と。あ。つ。せ。ん。と。宣。の。と。も。



つかひあつて助かひせん。とこそ公まがりし八重の。めし  
 と祈付らんや。はれど人の誠をみるハ。かたれ時め侍れば。殿下試さも毛  
 國將を召く。苗様いふ宜りん。毛國將半島の私さ。王女も又  
 孝行の志空しく。かたれば。儀ふるらん。や希ひあふ。その孝公を  
 神も憐れ。つかひ子小撫ても。民を救んと。おひさふ王の賢れた。後  
 を。國人亦感激せば。募あつて。とも儀ふる。のさあへ。さうさへ  
 王女の身小恙なく。禍ま地小攘除。位を侍らん。も再崇め侍  
 らじ。とさし。ごら。言の。儀の。伎倆の。畏み。入る。とさへ。さし。て  
 尚寧王を。ば。ご。さ。ら。ま。て。た。小。故。び。の。身。が。ら。所。寔。小。あ。う。かり。  
 され。ご。かり。の。さ。小。公。つ。う。ご。り。し。こ。も。愚。な。れ。と。慚。愧。て。只。管。は。嘆。賞。し。  
 中。城。の。使。次。を。し。て。毛。國。將。を。召。さ。じ。り。り。

第三十四回

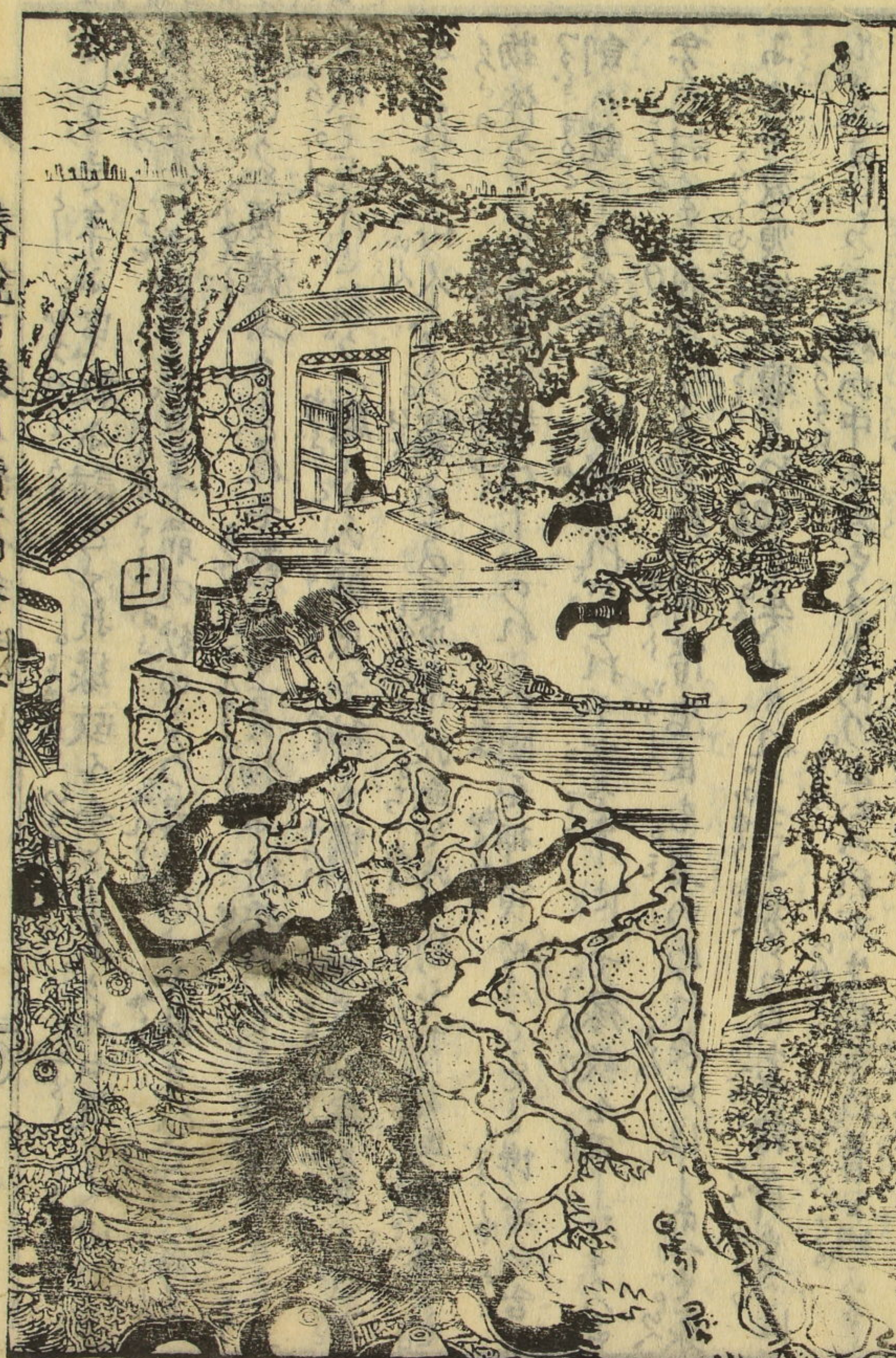
寧王女躬を棄てて。儀ふる。と議さ  
 廉夫人味小達と。更上母。又悼む

尚寧王へ。輝の。越。か。い。ま。中。城。へ。ま。え。さ。し。の。ね。も。寧。王。女。へ。さ。ち  
 世の風声を。り。れ。ま。て。有。一。日。廉。夫。人。小。宣。あ。り。海。山。の。荒。ら。る。神。の。崇  
 つ。り。と。ご。り。な。れ。こ。の。ゆ。え。小。治。業。の。し。ら。れ。た。失。ひ。つ。民。の。歎。さ。も。い  
 と。痛。し。父。王。も。足。の。と。や。さ。と。公。苦。し。く。お。ぼ。さ。ら。め。ま。れ。か。ら。ふ。と。ご。り  
 朝。ま。ゆ。ら。ふ。小。丘。折。し。て。君。真。物。を。祈。さ。し。も。誠。の。道。は。稱。ね。や。そ。ご。り  
 ごと。ご。り。験。も。な。し。あ。う。北。谷。の。託。女。阿。公。が。幼。ま。う。せ。し。は。と。ご。り  
 年。も。月。も。日。も。時。も。さ。ま。辰。よ。し。れ。合。さ。る。女。子。小。儀。は。し。て。水。神。上。進  
 ら。せ。な。べ。世。の。ど。か。り。ふ。か。る。べ。と。ま。え。あ。げ。さ。ら。て。國中。に。属。託。し  
 て。その。女。子。小。儀。と。ご。り。か。れ。ば。身。の。な。れ。と。年。月。の。阿。公。が。り。



ところふ符合とて。聖へのとりて。首里ふとあり。あか経を折る。この月夜  
 神へ進ませるん。今宵うだりの名残ある。なうん後ハともかくも。とり  
 せまへし。とりひりて。目次拭ひるん。廉夫人。女もあへど。うら驚馬。この  
 めひも。うけぬ。金の枝玉の。うら。世をもあし。居る。これ中城のおん。才  
 めて。うら。國の為。こと。て。様。と。う。んと。宣。や。も。これ。を。許。う。ん  
 や。か。ら。ん。る。の。戯。と。ゆ。し。も。宣。あ。な。さ。う。ね。と。小。佞。入。ら。ら。く。眼。を。睜。耳。次  
 側。つ。中。婦。君。も。告。ん。と。て。隙。を。窺。ひ。は。ら。り。の。次。いと。不。足。え。む。と。諫。と。ハ  
 寧。王。女。か。も。て。う。ま。さ。な。ぐ。の。人。の。う。ふ。え。と。し。ふ。も。女。を。公。より。外。ふ  
 あ。く。し。く。人。ふ。お。し。め。ら。う。宿。世。あり。なん。況。く。世。を。後。位。代。嗣。か。は  
 よ。う。の。影。護。も。傷。い。く。と。り。ん。一。熱。お。中。城。も。遷。されて。嫌。忌。の中。ハ  
 世。代。會。り。高。れ。梢。の。風。は。折。ら。う。代。亡。志。を。傳。へ。ん。ハ。う。ま。ふ。あ。は。は。を  
 殺。して。仁。を。な。し。國民。を。救。る。ハ。神。も。憐。し。人。も。喜。ぶ。その。應。報。空。う。う。し  
 て。王子。誕生。せ。わ。ん。ん。あ。い。こ。よ。う。れ。國。の。洪。福。く。り。王子。誕生。お。う。ば。も。王  
 孫。ゆ。して。臣。下。ふ。つ。な。れ。り。の。な。さ。し。も。は。ら。び。その。ひ。と。り。二人。と。い。つ  
 ハ。清。身。う。亡。父。司。馬。順。德。それ。が。親。族。の。毛。國。丹。う。ん。ど。こ。な。天。孫。氏。た。子  
 孫。う。う。ば。や。これ。う。が。子。も。以。養。ひ。て。位。を。傳。へ。も。も。その。既。ま。ひ。と。つ  
 那。り。他。の。邦。あ。い。子。も。傳。ど。徳。ある。人。ふ。讓。と。る。次。聖。の。世。と。て。後。す。て。も。い。と  
 い。と。譽。る。と。せ。え。う。親。お。先。と。ら。ち。り。ハ。悲。し。れ。り。い。へ。ら。も。傳。へ。流。ど  
 病。て。墓。お。く。な。る。あ。う。ば。と。う。ら。う。も。い。う。ま。せん。何。も。も。國。の。為。と  
 と。思。ひ。滞。り。め。る。人。じ。う。が。身。も。あ。い。流。れ。り。と。い。ひ。慰。め。ら。み。て。廉。夫。人  
 を。誠。す。る。その。言。の。せ。あ。を。笑。は。る。は。胸。ま。つ。い。く。ゆ。が。り。つ。宣。の。所。理  
 けれど。又。その。身。あ。も。な。り。て。ほ。絶。ぜ。よ。う。が。父。司。馬。順。德。ハ。王。女。の。誕生





春記子長月續卷之二

春記子長月續卷之二



林記子長月續卷之二

司馬順徳  
其毒章  
赤子を抱  
官野湾へ  
脱る







及討せしむ。後悔の氣もええて。つが身は憐れもあふ。忝とあふ。忝とあふ。少しそ  
 憂を慰めつ。王女の成長もあを。まろひのりて。世子と仰がれ。人を  
 手代万代。後祝ふ。千々の光の言を。化して。民を救んと宣はれ。心  
 仁知り。すること。おがら。その臣下の人。入を。こめ。れ。國の。大。躬を。愛する  
 を。賢れ。君と。まろひ。く。よ。し。な。れ。る。ま。宣。ひ。と。と。言。語。を。盡。して。と。と。ひ  
 と。の。王。女。孰。か。果。て。歎。息。一。朝。あ。せ。り。て。夕。あ。死。を。蟬。蛸。と。い。ひ。出。さ。り。  
 命の惜しと。と。と。の。親の歎きも。か。り。の。と。と。世の護の國を。棄  
 王位を棄て。只。嘗。み。死。ん。と。ね。が。ふ。あ。の。あ。ね。ど。か。と。な。れ。ど。父。王。の。終  
 者のまろひ。を。実。言。と。して。人。を。疑。ひ。ま。あ。ら。ま。あ。ら。り。と。ね。お。よ。う。て。此。度  
 特。ま。ら。ん。べ。れ。の。を。募。ま。あ。ふ。その。人。を。お。も。ろ。い。で。吾。儕。を。こ。そ。と。あ。が。り  
 ば。も。利。勇。ホ。が。た。と。と。り。て。不。思。議。の。仰。あ。る。ご。う。も。量。ら。し。その。と。と  
 固。辞。も。も。る。と。も。こ。の。と。と。許。し。ま。ら。ん。や。は。し。又。別。お。その。人。あ。り。と。も。罪  
 な。れ。の。が。殺。さ。る。の。み。お。小。摘。く。の。と。痛。は。し。異。國。の。い。あ。へ。ま。老  
 たる。親。を。野。も。棄。山。も。棄。一。劍。あり。と。ま。く。ハ。実。然。是。ハ。又。それ。お  
 も。あ。ら。ぬ。神。慮。人。を。り。て。扱。ま。定。る。國。俗。を。悲。し。けれ。夫。亦。た。り。と。且  
 く。も。さ。め。か。と。れ。の。有。為。將。變。の。理。り。去。て。あ。ら。び。ぬ。ら。る。ハ。冥。土。黃  
 泉。の。別。と。い。急。惜。哀。慕。の。悲。し。と。テ。よ。じ。め。ね。る。か。れ。を。本。の。露。  
 未。の。粟。先。が。つ。も。後。ろ。も。別。と。い。つ。ご。お。ま。じ。か。る。と。ま。ま。い。ま。人。と  
 い。く。つ。ま。わ。が。ん。と。し。ま。る。袖。を。廉。夫。人。引。と。り。て。その。物。あ。や。扱。ひ。ま。ら  
 君王の仰。あ。ら。は。是。非。小。及。び。ご。ご。う。う。求。め。て。牛。馬。小。牙。を。比。し。あ。ら。り  
 かと。送。小。疎。れ。疎。られ。緯。果。一。か。れ。折。し。も。あ。れ。按。司。毛。國。典。咳。して。廊。の。方  
 より。鏡。入。り。欄。干。の。あ。ら。と。半。指。ま。し。と。れ。翠。簾。の。け。と。り。あ。路。踏。し。

春 兎 子 長 月 讀 書 卷 之 二



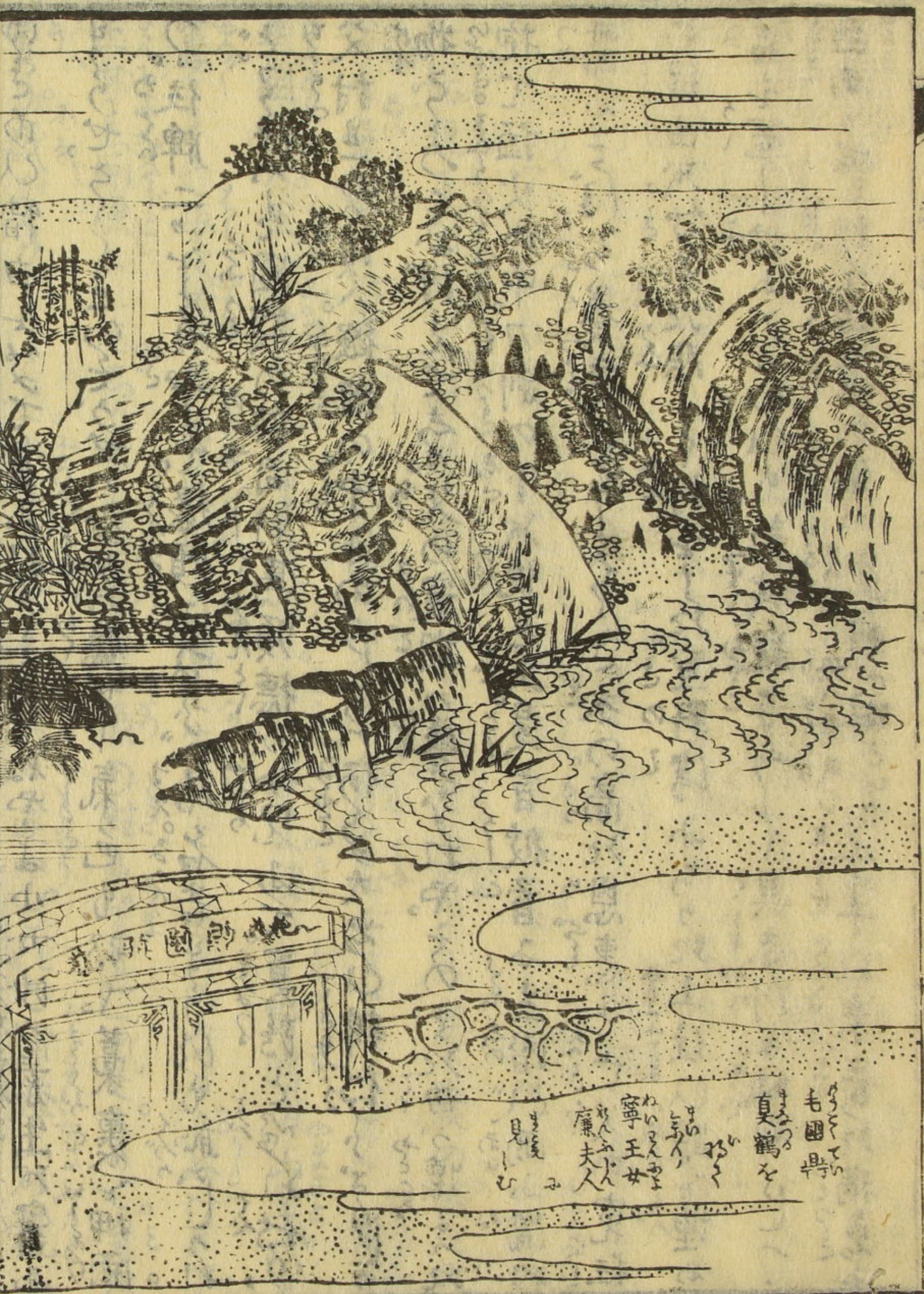
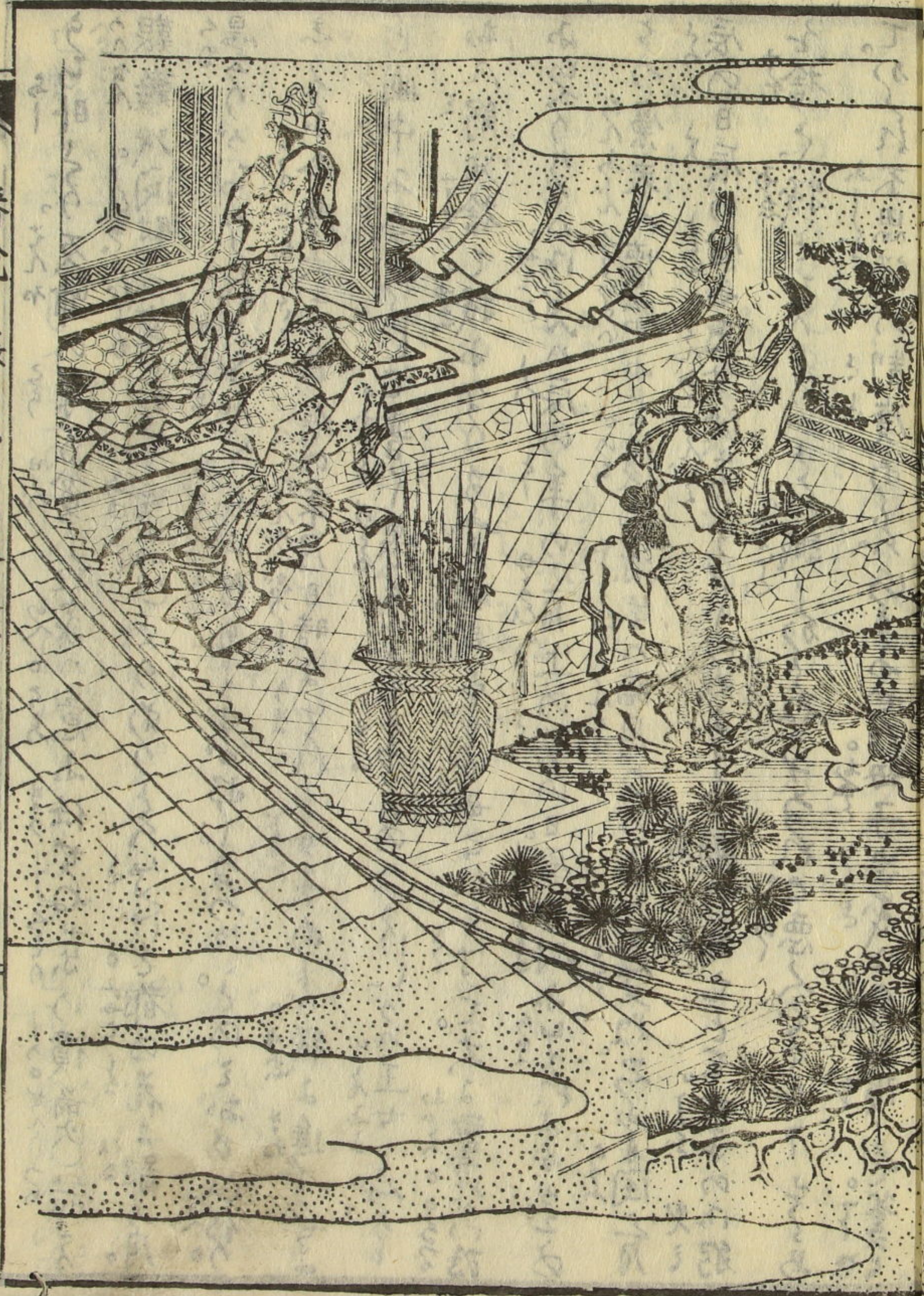
おん才女棄く國民を救んと宣ふ中城殿の仁公ふられ又理次速く  
 禁めりし廉夫人の恩義重たのづれをいづれとまれば一五一十を彼  
 知りて宥竊せし不えお感涙を拭ひぬぐひし。抑今度阿公が勅まう  
 せし律の慈を按ざるま。この詭の計策あて彼がふよりおとるふいあふ  
 け。この王女をらしむひもふんと計校悪人むかひのせしむるべし。まう後  
 今朝も君王小臣を首里の王宮お召はして潜に仰つらるりあり。その夏  
 別後あふは近曾普く國中招募ひし様まなるべし女子はし王女  
 の伶俐のむ彼お同くその人を定めよ。これお手只おとりの急父子  
 なればいと不便ぬこそと宣ひし。これ全く王女ごうら様おなりて危  
 竊を救へと仰まれば謎ごと措せし。うけまらる。と中果く退かひし  
 が。法はりも果ぬお廉夫人の声を惜まよと泣く。轉輾こらまらひし  
 かしぬくのうらうら悪人むかひが伎倆とありし。一言も諫まらば阿公  
 阿公と退出し。利勇かお相語れて。中婦君のおそら。てつ君も  
 君なりのおそぬお。しむるのありとも。國お一人の世子おはしむる  
 の死ねし。と宣ひし。とて理ふたれ。うらめしむる君のゆらう。りひ  
 かなれお毛國丹阿公が勅まうせし。これ幸あふ。今も。このおを  
 様お進めよとせよとくも。うらめしむる涙の溢の。りひ  
 王女お慰めり。さればこそおひしことよ。まこれ過世の悪業うらむ  
 をまらみもひそ。と脊の樹とて嘆入りて。まじし回答のうらむ。  
 毛國丹のこの形勢おも騷と膝をうらめて声お細りし。とてうらひ  
 めされてお。敬慕たもも理り。様お臨と変は。這奴おが伎倆のら  
 次かく謀の。後王女。ごうら様おうらんとて北谷お赴た。まも。



毛國典かてり人む。あん身お恙あるべうのゆらみど。あだしく経も危き  
 に信しなむらんこと公若しくあふ折ら。そくくはも様とおらん  
 まうに女子をおくまありてぬ。こやくと嘆きて外をさし招けむ。  
 をいといへて花園の猪折戸を押しふた。走り入り孫相の縁よみと  
 かけ袖ふる賤女あがり容止の磨りて清れ玉を巻く。芭蕉布の單衣  
 を裾短ふ引折て府衣の帯結びひげ。脊お負する蒿裏の軽打  
 粉も愛敬つれと。年ハ三五の月の眉今る花をよれかごとし。當下  
 毛國典ハ王女廉夫人おまうにやう。は後せよ彼ハ宜野湾の山里よと  
 窈窕しくて母が養ひ芭蕉布を織て生活とむとのあるがほけほど。  
 王女と同庚にして。あうも三月辰の日辰の時おせしとそりて身  
 賣り。様よあうらんとして小臣が家よまする途中。これと浦添山の麓  
 いさめひ情由をみて直おれとありぬ。やよ小女汝が素生況審お  
 まうせとくくとのそせハ少女ハ臆せ一氣色もおく。蒿裏を押し  
 了。位牌ニとより出して。縁煩ふあうへ居名告まうはも取しけれ。  
 ど。もハと國頭の按司司馬順徳が女見みて。真跡と叫れ侍り。  
 父討止つる頃ハ繼継の中おのりし。何れたどひ辨侍らざりし  
 物らうのをおげえてある父の最期ハ夢なれや。そのと母ハ懐こられ  
 抱て猛火の中。刀劍の下で死と出。是首彼首お支潜と雨ふ濡れ  
 舟路おさぼら。養育してし。木の高れ恩恵し亡父の冤狂  
 の縁由おやくに悲しく朽をく。宜野湾ふらう山住ひ跡を埋め  
 名を匿し世おあのかひも新城親子うく具志川お袖おしつ。  
 泣あうせし。母章の媪ハ。母ハ章氏し。二年以來長れ病と

新編御成敗式目  
 川ハ宜野  
 城員志





真鶴を  
 毛國典  
 見し  
 寧王女  
 廉夫人

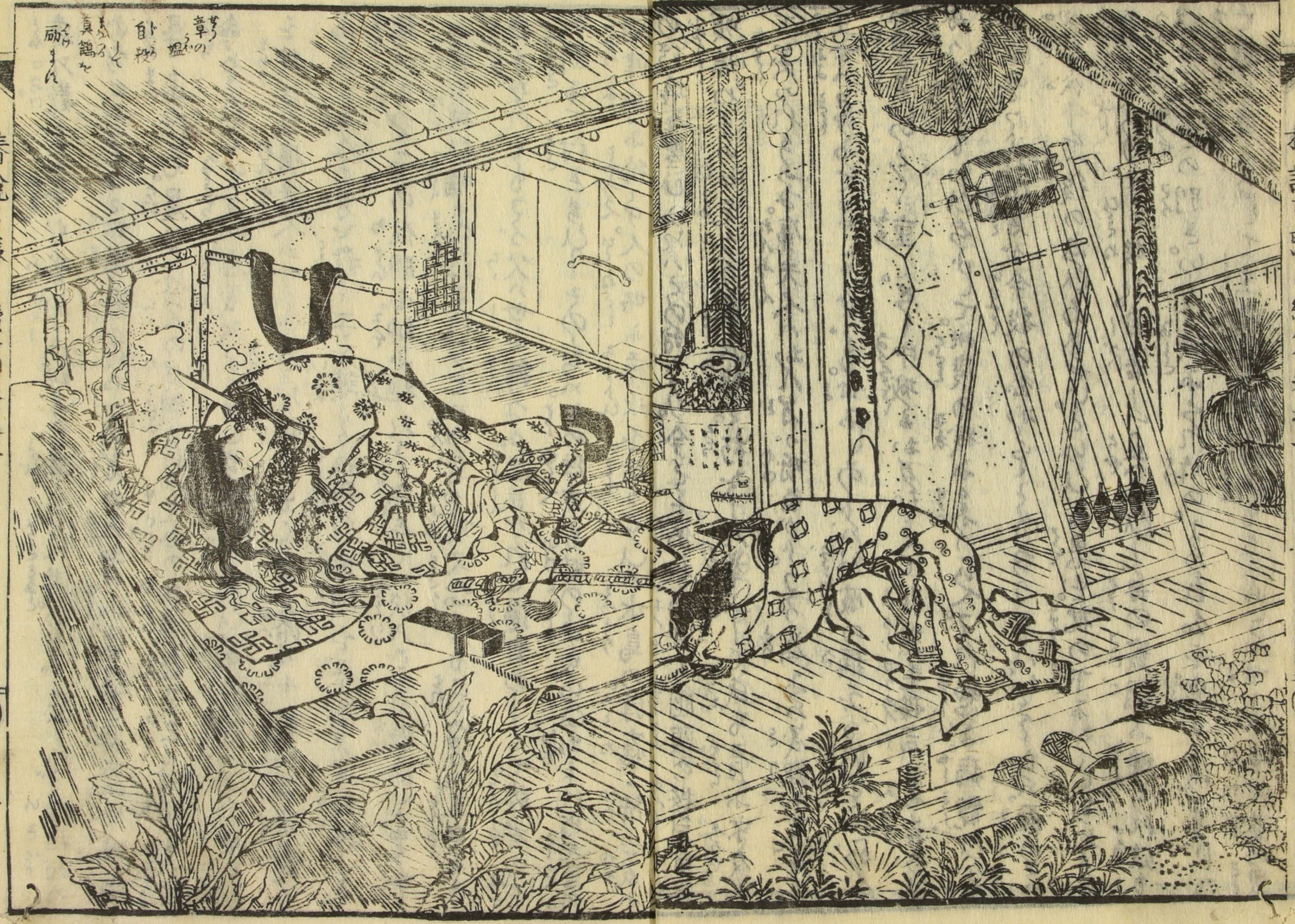


うらみし。反哺の孝も貧乏の家へ意お任せぬ。茶の價前、詰る  
 艱難、同尉の友もな。城君ひとりめり、とらげけと都の花は鄙の月。  
 曇りがらなれ、身と恥と風、使もよすが好く、まじり。このおめひ、侍り  
 志るふ、今度六王より、辰の年月日時、せれ。女子あふ、狼は進、せま  
 と國中、お令あしして、普く募るへも、あるりのな、りし。王女、ごうい  
 おん、躬に捨て、扱おなり。まふと風声、そが母、これをすて、大に驚、馬をい、踏  
 おり、りり、る。辰の年の、上、の辰の日、辰の時、おけ、れ。る。か。こ。め  
 とら、廉夫人、懐胎、おて、後の、流、生、は、臨、月、なる、は、し、と、ま、ね、ら、る。月  
 辰の日、辰の時、お王女、誕生、ま、し、く、け、れ、す。や、國、の、為、こ、と、て、世、子、の、み、躬  
 を、捨、て、扱、と、なり、ま、ふ、と、誠、く、か、ね、る、ま、れ、と、悪、人、ご、う、が、ア、と、ま、め  
 て、か、れ、不、思、議、の、制度、あ、ら、う、お、せん、母子、忠、義、を、命、を、限、し、て、答、え、と

の、行、名、を、雪、し、へ、れ、は、この、所、なる。今、こ、も、あ、れ、は、身、も、團、頭、の、按、司、司、馬  
 順、徳、わ、の、女、兒、あり。事、に、極、る、朽、を、し、れ、奉、止、し、て、氏、も、云、月、不、及、と  
 て、笑、し、れ、ま、あ、る。廉、夫、人、の、お、ん、が、か、ね、る、ま、ら、う、が、為、あ、ら、義、理、あ、る、ふ、じ。  
 王、女、の、君、あ、て、ま、し、し、せ、ま、も。世、に、あ、ら、外、戚、の、稱、を、の、け、ま、じ、か、れ  
 へ、思、義、し、と、く、重、し、と、く、中、城、ま、お、り、し、て、親、族、も、按、司、は、名、告、め、し、  
 母、の、志、を、も、い、ひ、ま、し、て、此、度、の、扱、お、ま、り、の、い、ふ、れ、勅、を、病、體、ひ、く  
 後、の、お、い、ふ、が、今、般、の、公、か、て、ま、り、な、ん、い、と、ら、ば、面、あ、ら、  
 短、刀、を、閃、り、と、引、抜、れ、自、害、し、て、失、ま、ひ、し、母、の、最、期、お、練、ら、れ、は、ち、  
 泣、き、ぬ、一、世、の、別、れ、い、と、い、く、涙、お、ら、れ、竹、の、よ、め、れ、公、を、鬼、よ、し、ら、う、し、て  
 亡、骸、を、煙、と、ら、し、て、ま、の、げ、る。浦、添、山、も、う、め、じ、く、世、の、安、波、茶、の、里

浦添山へ  
 宜野湾へ  
 ちり安波  
 茶の音  
 善天間  
 伊祖の村  
 浦添  
 浦添  
 浦添





草の  
盤  
針  
自  
真  
麗  
ま  
は  
り

春  
鏡  
の  
長  
月  
續  
集  
卷  
之  
二

林  
語  
臣  
別  
冊  
續  
集  
卷  
之  
二

九  
四



遠れ勤と今も昔同山。ゆくり旅ぐら枝港しちいとすれど伊祖村の  
 ありこふえの姑場嶽これやろが身死の山波女は女冥土の中城漸  
 命めされ亡父の忠義承てはしむひねととひ定め物かへり長袂  
 を絞る。廉夫人ハサ毒ふれ拭へともろり落る千行の涙沸かへり  
 ありまんと身を殺し子を諫める母親の最期を今もえん公地へ  
 轉ひ出つ二ッの位牌を袖に抱れろ亦あはれ殺入せり勤にしが中々  
 小涙を拭ひ喃さの語られそハハ身が又悲くも思はるハ王女あま  
 在とんれそもろが父ハ世に稀なる忠臣なれど過世あへて諱者の舌  
 の劍おて討とむひ一そのらハ母の往方も妹のゆも。ゆひあはれぬ九重の  
 國津都お給るゆ人の好ハ流氷を流るるハ水鳥の浮床は待たるお  
 代らんといふその人ハ母ハ義理ある妹あり。とてもかくても安らぬ公の  
 駒も勇難くおなじ道おを踏迷ふ。強面りの命と。といハハ又  
 上り。その好君おておしせし後悪なれおん顔は。おんれろ年暮の  
 志ハ致しなり。命おられおありつる。その語おおを思ふとて。不覚お  
 歎とておあまん。情はしと怨むれハ。寧王女ハ是彼の公のらちとてハ  
 かり。感涙とふれおくあまの。あれはのぼせよ。と仰とれハ。毛國典ハ  
 あり。おておの語かまを携て。はとり近くおておありつ。王女ハ  
 膚とて揃ひもそろひ。親子ハ忠孝けお順徳が妻ハ子なり。かく







